
どうしよう、息子が帰省してくれない。

午睡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしよう、息子が帰省してくれない。

【Nコード】

N2592V

【作者名】

午睡

【あらすじ】

手塩かけて手間暇込めて育てた溺愛してる息子（苦労人）を涙流してハンカチ噛み千切って見送って早数年。

どうして一度も顔見せにこないの?! 反抗期なの?!

顔見せにくる手軽さ不是吗?こじ。

手軽に帰ってこれるように車だって派遣したもん! つか死ぬ気に

なれば転移魔法かなんかで一瞬じゃん！

車っていつかガーゴイルなんですけどね？それより仕事ですよ陛下。

そんなかんじで息子溺愛してる魔王陛下による息子それとなく帰省させよう大作戦。

主な被害者は息子と巻き込まれた家臣及び下界の方々。

そんな家族愛溢れるハートフルストーリー

（後半噓）

盆と正月は基本だそうです。（前書き）

魔王が魔王らしくない。

文章が稚拙。息子不憫。作者素人。そしてなによりストーリー性があまりに乏しい。

それでも、読んでやるよっていう勇敢な方は是非ご覧ください。

盆と正月は基本だそうです。

「何故じゃ・・・・・・・・」

ぽつりと小さく呟かれた言葉は、回りにいた者達は一斉に玉座へと視線を向けた。

青い炎が白く照らし出す広間。

広間の雰囲気は重々しく、何人たりとも近づけさせない威圧感を醸し出していた。

その中で、ただじつと王座から発せられる言葉を石のようにまつ彼達。

彼等は、ただじつと待つ。

彼の者が発したその言葉以外を受け付けずにじつと。

「何故なんじゃ・・・・・・・・」

酷く弱々しく紡がれる言葉。

その声音にいつものような威厳はなくただ憔悴しきった声。

「陛下――――」

あまりの変わり様に、耐えきれなくなりとうとう沈黙を破って、
1
人の男が椅子から立ち上がり口を開いた。

「のう、アガレス」

唐突に、玉座の主は男の名を呼んだ。

「何で御座いましょう、陛下」

立ったまま、己の主が言葉を紡ぐのを待つ。

「下界には”帰省”なるものがあるのじゃろっ？」

「は？」

思わず、素っ頓狂な声が口から漏れてしまったことに心の中で舌打ちをした。

しかし、周りにいる他の重臣達も皆、それぞれ一様に驚愕の表情である。

「た、確かに下界には”帰省”なる風習がありますが、それが何故なにゆえに陛下のお気を悩ませるのでしょうか？」

出来るだけ動揺を隠し主に質問をする彼の姿に、周りにいた何人かが心の中で拍手を送った。

「そう、帰省じゃ。確か下界では親の元へ子供が帰る風習だとか」

どこか遠くへ思いを馳せながら喋る主を見て、その広間に集まっていた全員の背筋に冷や汗が伝った。

まさか………。

”親”、そして”子供”と、この二つのキーワードがつながるのは。

「へ、陛下………もじゃ」

そこでとうとう、玉座の主は声を荒げて叫んだ。

「ならば、何故っ妾の愛し子は帰って来んのじゃああああ!!」

その叫びは広間を大きく揺らし、広間の外に待機していた下位悪魔達を気絶させるほどの威力を持っていた。

その咆吼で気絶はしないもののよろめいたり立ちくらみを起こす者数名。

「落ち着いてください!陛下!!」

「黙れ!妾は落ちついておる!愛し子を下界に預けて早10年!幾ら何でも長すぎるぞ!!」

なんとか気張って耐えるものの、気を抜けば怒気にあてられ卒倒しそうだった。

だれか、ヘルプ!!

「お言葉ながら……陛下、さすがにそれは無理でございます」

囁れた声とともに、1人の男が腰を上げた。

毅然とした態度、ピンツと伸びた背筋。

鷲のように鋭いその眼には知性の光が見える。

まさに、家臣の鏡と言えるであろうその態度。

「何じゃ、アモン」

幾分か叫んで落ち着いたらしく、その声音はしっかりとしていた。

「お言葉ながら、月日は光陰の矢のごとしとでもいいでしょうか、

今一度我々の世界へと足を踏み入れるのは彼にとって困難ではない
でしょうか。」

彼……、それが誰だかは皆が知っていた。

「何が言いたいのか。」

その先に続く言葉が分かっているからこそなのか、再び声音に不機嫌さが混じる。

「彼は――――今ではもう立派な人間で御座います。」

よく言った――！

アガレスは心の中で彼を絶賛した。

そう、もう大体の方は察しているであろうが、ここは泣く子はさらに泣き喚くおぞましき魔界。

そして下界とは即ち人間界のこと。

他にも天界や冥府などがあるのだが、面倒だから割愛。

そして、この広間の中央、玉座に座っている、この方こそ。

「少しは、ご自分の御立場を認識なさってください
魔王
陛下」

不機嫌そうに、足を組み口をとがらせる魔王に、家臣一同は皆溜息

をついた。

盆と正月は基本だそうです。（後書き）

読んでくださった勇者な方々ありがとうございます。

出来れば感想や指摘などしていただければありがたいです。

魔界へいらっしやい(前書き)

前回と変わらず文章はT I S E T Uです。

そしてあまり進展がない。

それでも見てやろっじゃねえか！という賢者な方はご覧ください。

魔界へいらっしやい

「そうじゃ！」

また重くなった広間の雰囲気を一掃するかのように、魔王は言った。

「なんなら妾^{めかけ}が直接出向いて・・・」

「「「「「「「「やめてください」「「「「「「「」

彼女の提案を遮るように広間にいた全員が叫ぶ。

「なら、どうしろと言っのじゃ！！」

二度目の咆吼で今度は天井にぶら下がっていたシャンデリアが降ってきた。

激しい音を立てて円卓にぶつかるシャンデリアの音は静かになった広間に反響した。

「しかし、陛下・・・」

再びアモンが声を発した。

「失礼ながら、人間が我々^{魔界}の世界にやって来るには膨大な魔力と強靱な肉体が必要で御座います。ただでさえ、ここには下界とは比較できないほど凶暴な魔物のなども生息しているのですぞ？」

そこで、一端言葉を切つて己が主を見上げる。

彼女の表情に怒りが見えない事を確認してからアモンは続ける。

「今下界と魔界は対立しております。その状況で愛し子様が此方に
出向くとなると・・・」

しかし、アモンの発言は最後まで続かなかった。

何事だろう、とアモンを見ていたアガレスは視線を彼女の方へと向
けて、固まった。

彼女は、魔王は、微笑んでいた。

しかもものすごく嫌な微笑みだ。

真紅^{リージュ}の唇は三日月の弧を描いていた。

そしてその瞳は獲物を見つけた獣のように爛々と輝いている。

長年彼女に仕えている彼等は悟った。

これは、不味いことになる。

「へ、陛下・・・？」

さすがのアモンも動揺を隠せない。

魔王は微笑んだまま口を開いた。

「つまりは、我らの世界に來なければならぬという、そういう状況にさせればよいのじゃな？」

そういう状況……。

それは、つまり……。

「ならば、話は簡単じゃ！妾^{わらわ}の愛し子を勇者として魔界^{まがい}に招けば良い……！」

今度ばかりは沈黙せざるえなかった。

誰一人として言葉を発する事が出来なかった。

ただ、皆口に出さなくても思うことは一つだった。

だれか、助けて……！！

彼等の振り絞るような願いも空しく、魔王は嬉々とした様子で計画を練り始めていた。

その後、広間の外で待機していた下位悪魔達は、広間から出てきた重臣達の顔色をみて、
なにか良からぬ事が始まるということを悟った。

その後、家臣総出で説得を試みるも、失敗。

そして魔王は魔界中の全てのものに厳命を下した。^{彼女}

- - - - - 勇者をあぶりだし、必ずやこの魔界へと連れてこい。

そう高らかに言った魔王の隣には、二、三日で死者とも冥府の遣いとも判別つかぬほど青白くなったアガレスの姿があったという。^{彼女}

魔界へいらっしゃい（後書き）

わっほーい。

描写表現乏しすぎだ。

ご指摘などがございましたら、是非ご報告ください。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2592v/>

どうしよう、息子が帰省してくれない。

2011年10月8日03時56分発行